



遊学舎武雄こども園 園だより

2024年（令和6年）度7月号

「174のこころ」

ある朝、一匹のオハグロトンボが玄関に入ってきました。

登園してきたばかりの園児さんごきょうだいが、ぴたっと足を止め、風を泳ぐように飛ぶ、その透き通る羽を見つめています。朝の慌ただしい気配の中、小さい二人のまなざしがあまりにも静かで真剣で、そこだけ特別な空間のように切り取られて見えました。

先日研修で、山梨県清里の原生林を散策する機会を頂きました。案内してくださったのは森の案内人・小西貴士さんです。

その森は、歳月を経て朽ちてゆく樹もそのままに在りました。おそらく公園などでは危ないからと撤去されてしまう。でもそんな枯れゆく樹たちもまた、水を保ち、生態系を支える役割がある。そんなお話を伺いました。

ある樹では、枝が折れてできた穴から別の植物が芽吹いていました。「このタネはどこから来たのですか？」と参加者から何気なく質問があがりました。すると小西さんは、「鳥が枝で休んで、食べた実を落としていったのかもしれない、リスが運んできたのかもしれない。もしかしたら、小さい人が、拾った実をこの穴に入れていったのかもしれない。これがどんなふうに芽吹いたか、想像してみるとおもしろいですね。」と答えられました。

森で何かを見るとすぐ「これは何ですか？」「どうしてこうなるんですか？」と質問して、いざ答えを聞いたらそれだけで満足してしまっていたわたしたちに、知識と答え合わせをするだけでなく、目の前にある存在そのものを見つめて、触れて、想像すること、そんなことの楽しさと大切さを気づかせてくださる言葉でした。

園庭で、お部屋で、たくさんの不思議にふれる小さい人たち。目の前にある世界を見つめるその真摯なまなざしを、憧れと愛おしさを込めて見守らせてもらいながら、一緒にこの世界を楽しんでいけたら嬉しいなと感じました。





❀ 「おもしろい!」を見つけたじゅんの笑顔! ほかの言葉でもなく自分が発見してからこそ、より心が単純なのでしょ。おもしろい! は次に、不思議に思う好奇心につながります。「ふん?」「もっと知りたい!」は全ての学びの起点。そのワクワク感をもった探求が、考える力、試行錯誤する力、粘り強さなどの生きる力につながるのです。私たちは、そんな子どもの探求の場を保障し、夢中になって遊びに没頭を温かさをもって支えていきたいと思えます。3歳のじゅんが見つけた遊びの種。これからどう不眠不休、育てていくのでしょうか ☺

夏本番もすぐそこまで。それぞれのお部屋では、お友だちとの関わりから始まる小さな物語がたくさん見られるようになってきました。色遊びが大好きな2歳児さんのお部屋では、子どもたちが心のままに色をつけた大きなラップを巻いた机の中央に電灯をつけ、そこで見られる不思議な色の変化に、目を輝かせながら光と色を楽しむ姿がありました。

そんな遊びの後の風景。保育室の床の他、絵の具やマジックがついたお友だちの足の裏を拭く子の姿がありました。拭いてもらっている子はくすぐったくて笑いが止まらず、一方で拭いてあげている子は真剣そのもので、まるで小さなお母さん。

育児とは、苦勞や抵抗があることに積極的に挑み、工夫し、関わろうとすることで「その子のために」「人のために」がどれだけ大切なことなのか、親が学んでいく営みだそうです。それまでは多分、一番大切であったであろう自分を越えた他者を護り、深く愛すること。そこで得る喜びと痛みは、我が子に出会うまでは想像もできなかったものであり、初めて自分の本当の力を知ることもあるのではないのでしょうか。

これからは予測不可能な世の中になると言われていて、次々と生み出される文明は、私たちの生活をより快適に、楽なものへと変え、そして華々しく見える。

その傍らで続く一見すると地味で、ゴールの見えづらい「自分よりも大切な存在を護り育てる」という何の変哲もない日々。それは、ともすれば投げ出してしまいたいようになるくらい気が遠くなる日々。しかしそんな自分以外の「人のために」積み重ねた日々こそが深い幸せとなり、どんな文明でも成し遂げられない偉業となるのでしょう。

「しあわせって なに
自信を もつこと
自分を たいせつにすること
そして
自分とおなじくらい
ほかの人も たいせつにできること」

『しあわせ』 レイフ・クリスチャンソン

